

リレー随筆

植物検疫の現場から(3)

北海道での種馬鈴しょ検疫

ジャガイモがきらいという人に、私はまだ会ったことがない。淡白な味と白い色に加えて、ビタミンCを含む栄養価の高い食品である。終戦後食料難の時代にジャガイモで空腹をいやした人も少なくないと思う。私は植物防疫所に勤めて20年、この内13年間北海道の種馬鈴しょ検疫に携わってきたので、その概要と思い出を書いてみたい。

馬鈴しょは栄養繁殖によって増殖する作物で、その増殖率は低く、植付けた種イモの10～15倍しか収穫することができない。また、ウイルス病や輪腐病などのような病害が種イモに伝播して次代の生産に大きな被害を与えることから、健全で大量の種イモが必要になっている。

我が国の種馬鈴しょ採種体系は、全国に8か所ある種苗管理センターの農場から生産された原々種を元種に、道県直営の原種農場または委託原種圃場で一年間増殖された原種を、種馬鈴しょ生産農家の採種圃場で増殖したものが、種イモとして全国の一般農家で栽培されることになる。

植物防疫所では、採種体系の中で原種と採種用馬鈴しょについて、生育状況に合わせて第一期、第二期、第三期に分けて栽培地検査を実施し、病害虫のまん延を防止している。検査対象病害虫はジャガイモウイルス、輪腐病、そうか病、ジャガイモガ、ジャガイモシストセンチュウなど9種類である。

種馬鈴しょ検査は申請書の受付から始まる。今年は北海道の93市町村(農協)から、約6,000haの申請があった。北海道は比較的冷涼な気候で、ジャガイモの生育に適しており、全国の種イモの90%以上を供給している。また、栽培されている品種も多く、食用の男しゃく、メークインをはじめ、デンプン原料の紅丸、コナフブキ、ポテトチップスなど加工用の農林一号、トヨシロ、早生のワセシロ等20品種を超えている。

まず、提出された申請書類によって、使用予定種馬鈴しょの確認と植付予定圃場の審査を机上で済ませた後、具体的な圃場検査の準備が始まる。

種馬鈴しょ検査を直接担当する札幌支所の国内係は3名しかいないので、支所の国際係、管内各出張所の植物防疫官をはじめ、北海道庁の職員で植物防疫員に任命された検査官の応援を得て実施している。また、種馬鈴

しょを生産している各農協には、植物防疫官を補助するため種馬鈴しょ防疫補助員が配置されており、生産者への指導も行われている。

毎年、6月から始まる圃場検査日程の作成は、広大な北海道を、各検査官の業務予定や馬鈴しょの生育時期を勘案しながら、限られた予算の中で、地方バスの料金にも配慮して組まなければならない、難しい作業である。

また、検査前には各検査官のウイルス病株判定技術を整一にするため「目慣らし」を行っている。受検者である生産者はベテランが多く、ウイルス病に関する高い知識を持っており、我々植物防疫官はそれ以上のウイルス病判定技術を習得しておかなければならない。近年問題になっているウイルス病には品種によって微妙な症状を呈するものがあり、検査官にとっては日々検査技術の研鑽に努める必要がある。

圃場検査は広大な北海道に点在するイモ畑を廻るため、点々と宿泊地を換えながら続けられ、長期の場合は2週間に及ぶ。したがって、手荷物は観光客顔負けの大きさになり、“歩く植物防疫所”の様相を呈する。

一日の検査は、毎朝生産者や補助員その他種イモ関係者が一堂に集まっている中で、抽出圃場を発表することから始まる。圃場検査は、北海道全体の日程が決まっているため、天気にかかわらず実施するため、雨具は必携である。我々にとっては、晴天よりも曇天か小雨程度の日がウイルス病のモザイク症状は見やすく好都合である。

広い北海道にはいろいろな圃場があり、知床半島の山奥ではヒグマの縄張りの中に圃場があり、検査中は周囲の森にも注意を払わなければならない。また、マムシの生息地では抽出圃場で朝捕れた現物をみせられ、足元ばかりみながら歩いたこともある。一日の検査が終了すると結果を発表するわけだが、地域内の全圃場が合格したことを伝えと、受検者は安堵の表情に変わり、検査の疲れも忘れる。しかし、不合格がある場合は言葉を選びながら来年に向けての対策を含めて指導することになる。

種馬鈴しょ検疫は、良質の種イモを生産することによって馬鈴しょ産業ひいては日本農業が発展することを目的にしているので、検査至上主義になってはならない。しかし、一方では整一な基準によって検査を実施することが重要なことから、我々植物防疫官は冷たい頭と大きな心をもって対処している。世界的な食糧不足が叫ばれている今日、ジャガイモが主要な食糧になることを考えながら、今日もイモ畑を歩く。

(横浜植物防疫所札幌支所 佐伯 勇)